

「蜂須賀侯日光参詣絵巻」についての二・三の考察

山 川 浩 實

はじめに

近世大名を題材として描かれた絵巻は、参勤交代の供建を克明に描いた「参勤交代図」をはじめ、藩主代替り時の「初登城図」や、「鷹狩図」、「軍列図」、「参詣図」など、その内容は多様である。^{註(1)}

阿波国徳島藩の場合、藩主蜂須賀侯を題材として描かれた絵巻として、参勤交代の供建を描いた「みとものつら絵巻（蜂須賀斉裕公参勤交代行列絵巻・蜂須賀茂韶公参内絵巻）」^{註(2)}3巻（森瀬魚親画）、^{註(3)}「斉裕公御鷹狩図」（伝同人画）^{註(4)}、「徳島藩軍列絵巻」^{註(5)}、「蜂須賀侯日光参詣絵巻」などが伝存する。^{註(6)}これらの中で、過去に年代・筆者をはじめ、供建の構成などが考証された絵巻はほとんどなく、ことに「蜂須賀侯日光参詣絵巻」については、現在、年代・筆者をはじめ、供建の構成、派遣の武士に関する重要事項はまったく明らかではなく、その全容は不明である。

そこで小論では、本絵巻に関し、本図に記された多数の徳島藩武士の姓名から、年代ならびに供建の構成について、若干の考察を行い、博物館資料としての今後の活用化を図りたい。

(典則)

註(1) 上野国前橋藩主「松平紀五郎初登城図」、群馬県立博物館蔵。

註(2) 徳島県博物館蔵。

註(3) 徳島市豊田進氏蔵。

註(4) 徳島市坂崎正氏蔵。

註(5) 徳島県博物館蔵。

註(6) 「斉裕公御鷹狩図」については、香川県の歴史学者猪熊信男博士の奥書と、「みとものつら絵巻」については、明治18年の小杉楓邨の奥書がある。

1 「蜂須賀侯日光参詣絵巻」について

1) 伝来

本絵巻は、昭和34年徳島市の三谷貴啓氏の寄贈にかかるものである。同氏は蜂須賀家の蔵品売却に携わった人物で、同氏の談によれば、本絵巻は、もと蜂須賀家の常三島の蔵に所蔵されていたもので、^{註(1)}^{註(2)}昭和23年の蜂須賀家の蔵品売却に際して世に出たものと言われる。当時、本絵巻は、他の3~4巻の巻子本と共に、内面を黒漆で塗布した桐材の小長持の中に厳重に納められ、長持は助任川の氾濫に備えて浮游の工夫がなされていたと言われる。

したがって本絵巻は、もと蜂須賀家に所蔵されていた絵巻であることに疑いない。

2) 現 状

法量は、縦34.3cm、見返横30.4cm、本紙横985.5cm、軸付横28.4cm、全長1,044.3cmで、縦幅ならびに本紙の長さは、近世の絵巻としては、ほぼ通常の長さを有している。表具は元来、本紙の巻頭部が損傷したため、後世全面的に改装されており、本来の緒・題箋（簽）・表紙・八双・見返・軸付・軸の装丁については窺い知ることは不可能である。

箱は竹釘を用いた古い桐箱で、箱表に「保第四拾参號」と朱書の蔵番号の紙片が貼付され、上部に「蜂須賀家日光社参行列巻物」と記された紙が貼付されている。しかしこの外題の表現は、江戸期の表現としては妥当と考えられず、しかも墨書きされた書体も江戸期のものとは考えられない。恐らくこの外題は、後世における改装時に付されたものであろう。

したがって本絵巻の外題は、「蜂須賀家日光社参行列巻物」とあるが、これは画図製作当初の外題とは考えられず、ここでは「蜂須賀侯日光参詣絵巻」の外題を用いることとする。

3) 内 容

紙本着色。画図の構成は、大きく分類すれば、前・中・後の3部構成で、前より徒士組、藩主・重臣、又供・仲間の各供建の3部に分類することができる。

画図は見返に続き、日光東照宮の石鳥居から始まり、それに近づく徳島藩の2名の武士に続いて、藩の長延な供建が描かれている。天地は截切で、共に大勾雲法の雲画法で雲が表現され、雲の上・下限間に供建が長く配されている。雲間に描かれた供建は、すべて鉤勒法による描画法であるが（図1），うち藩主の駕籠廻りの人物については、金泥による鉤勒法が用いられ、沿道には霞を表現した

多量の銀粉が供建の始終間に散らされている。描かれる人物は214名で、うち96名の武士には、胡粉を塗布した長方形の枠内に、金泥で徳島藩の多数の武士の姓名が記入されている（図2）。同時に奉馬・召馬・召替馬等の駒名にも



図1 鉤勒法による描画



図2 武士名の記入

同仕法で駒名が記入され、その風雅な駒名を知ることができる。

人物の表情は、ほとんど眉毛と眼を下げた画一的な表情で描かれるが、214名中、ごくわずかな人物については、眼を上げた比較的厳しい表情で描かれている。顔面の描画は、前額部から眉間・鼻・下顎にかけて、僅かに顔料を塗り残す技法が用いられ（図3），表情の画一化を防いでいる。

用いられる色は、白・赤・黒・金・褐・紺・青・緑が基調で、主として、白は武士の家紋、赤は召具装束・挟箱ならびに馬具の三繫（懸）、黒は小袖・鞘・挟箱、金は蜂須賀家家紋、褐は素襖・水田籠（飼葉籠）、紺は袴・小袖・素襖、緑は馬齧・小袖・狩衣などに用いられている。全体として、顔料は薄く、紫土（弁柄）と思われる赤色の顔料のみが鮮烈な色調を見せていている。



図3 顔面の描画

註(1) 蜂須賀家の藏品売却については、昭和8年の第1回の売却を嚆矢とし、続いて戦前の第2回、昭和23年の第3回の売却がある。

うち同氏は、第3回の蜂須賀家の藏品売却に対し、同家よりその売却を依頼された。

註(2) 昭和62年2月3日談。

2 供建の構成

1) 前列

前列の供建は、主として徒士組を中心とした構成で、石鳥居に近づく2名の武士に続いて、牽馬・傘・挟箱・撞木槍・徒士組で構成されている。

先頭の2名の武士は、姓名が記されずその身分は未詳であるが、後続の徒士組と比較して、上下共^{とも}裂の半上下の着用から、先払の徒士と考えられる。これに続いて、白張の召具装束を着用した牽馬・傘・挟箱・撞木槍の仲間・小者を主とする仕丁が続く。

牽馬は2頭で、それぞれ馬取2名、水田籠1名で組織される。牽馬は共に、虎皮の豪華な馬齧を置くが、この馬齧は藩主の召馬ならびに召替馬のみに用いられている。虎皮の馬齧は、「みとものつら絵巻」の藩主の召馬・召替馬にも描かれており、また陸奥国「南部藩参勤交代図巻」によれば、同藩主の召馬・召替馬にも虎皮の馬齧が用いられている。牽馬の三繫は、中列に描かれる召馬・召替馬や、重臣が用いる替馬の三繫と比較して、その色が大きく異なり、しかも牽馬は供建の先頭に配されることがから、この2頭の牽馬は、日光東照宮への形式的な献上馬として、供建に具備されたものと解釈される。
註(3)

牽馬に次いで、徒士2名による傘持が配されるが、本絵巻には、これ以降、徳島藩の家中（藩士格武士）を主体とする多数の武士の姓名が記されている。最初に姓名が記された武士は、徒士の（松）⁽⁴⁾森井芳吉（台左衛門）・村上延太で、村上は後年徒士格の下級士から平士格（200石）の中級士に立身した異例の人物で、白い傘袋に納められた⁽⁵⁾「御長柄傘」を持つ。挟箱一対は、4名の仲間が携わり、挟箱にはその上部を覆った赤地の油單に、金泥で蜂須賀家の丸に左万

字の家紋が付されている。撞木槍一対は、挟箱同様、4名の仲間と思われる小者が携わり、撞木は蜂須賀家の「御定御武具図式全」によれば、幅8寸、長さ1尺ほどで、丁字形を有し、材は羅紗（黒）⁽⁶⁾が用いられるとしている（図4）。この撞木槍は、「南部藩参勤交代図巻」にはまったく見られないが、「みとものつら絵巻」の「参勤図」・「参内図」の両巻には明瞭に描かれており、しかも文化8年（1811）・文政12年（1829）の両度にわたる蜂須賀家の日光参詣時にも、その一対が用いられている⁽⁷⁾ことから、撞木槍は蜂須賀家の供建における常備槍であったと考えられる。

この撞木槍に続いて、前列の主軸をなす徒士組20名が連なり、中列へと続く。老齢の徒士、板東吉郎に引率された徒士組は、同一に共裂の半上下を着用し、袴の裾を絡げて2列横隊の隊列を編成する。

徳島藩の徒士は、天明4年（1784）歩行から徒士に改称されたが、その人数は、天保五年（1834）段階で90人が確認される。禄は3人扶持支配8石が通例で、役職は奥女中を監視する奥目付や、供目付・不寝番などに当たられる。絵巻に姓名が記された徒士は、板東吉郎（元利）を初め、小出祐太（直甫）・加田仁左（右）衛門（湿厚）・桜間康郎（能道）・吉成角次郎・美馬左之丞・河野太三郎（致知）・河野富蔵（利恭）・岡田勇吉・高田邦蔵（泰一左衛門・斐成）・樋富猪藤太（右史）・三浦勝次郎（延寿）・岡儀之丞（居啓）・矢嶋権郎（茂之）・福永小源太（基直）・野田伴助（清平）・庄野岩三郎（守順）・青山芳蔵（芳吉・義正）・横山甚五郎（近義）・川嶋団之丞（正一）の20名で、文久元年（1861）全家中が藩に提出した各家の「成立書并系図共」によれば、彼らの大部分は、幕末の嘉永年間藩に勤仕していたことが知られる。⁽⁹⁾ したがって、本絵巻に描かれた蜂須賀家の日光東照宮⁽¹⁰⁾の参詣は、嘉永年間頃に行われたものと推察される。

うち小出・加田の両名については、跡式相続以前にこの参詣に派遣され、矢嶋はこの参詣後、徒士支配手許役（徒士小頭）に立身している。⁽¹¹⁾⁽¹²⁾

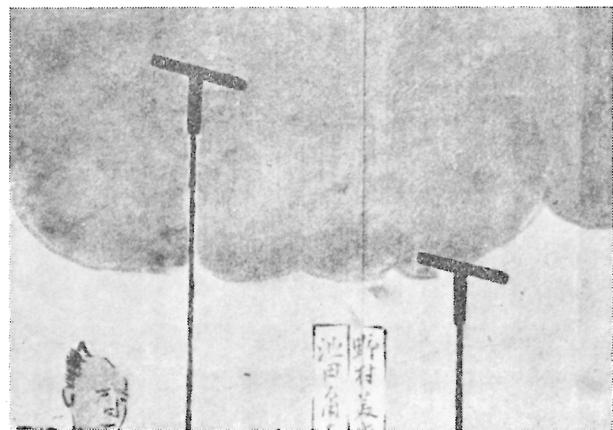


図4 撞木槍

2) 中列

中列の構成は、供建の中心をなすもので、藩主と重臣を中心として構成されている。前者は、藩主



図5 錫杖槍

の駕籠廻りに平士と供小性が固め、先供に長刀・錫杖槍、跡さきども供に腰物筒・十文字槍・傘・挟箱・茶弁当・召馬・召替馬が配されている。後者は、3名の馬上の重臣を主として、馬丁・又供・一文字槍・挟箱・傘・水田籠でそれぞれ組織されている。

前列の徒士組に続いて、まず中列の先頭には、長刀を持つ徒士とその介添、続いて錫杖槍持が配されるが、長刀を納めた紺地の袋には、蜂須賀家の家紋が白く染め抜かれている。これに続く錫杖槍は、蜂須賀家の特異な槍で、「みとものつら絵巻」の両巻にもその1条が描かれ、しかも文化8年・文政12年の両度にわたる蜂須賀家の日光参詣時の供建にも用いられている（図5）註(13)この槍は、錫杖頭部の宝珠を形どった槍穂筒に一文字槍をかぶせたもので、宝珠を形どった穂筒は、「みとものつら絵巻」同様、金泥で描かれている。元来錫杖槍は、慶長5年（1600）関ヶ原の合戦に際し、先代藩主蜂須

賀家政が高野山で剃髪後、阿波に持ち帰ったとされる錫杖に似せたもので、この錫杖槍は、昭和23年まで蜂須賀家の常三島の蔵に所蔵されていたと言われる。註(14)

藩主の駕籠は、本絵巻の中心をなすもので、先供の長刀・錫杖槍に続いて、中列の前半部に配されている。駕籠の前後・左右は、侍鳥帽子を冠し、略式の打掛、素襖を着用した16名の平士が厳重に警固し、さらに6名の供小性と、数名の供目付がこれに従っている。藩主の駕籠は、外面に網代を張った腰黒網代駕籠で、前方と左右にそれぞれるカ所の御簾が設けられている。この御簾は、文政12年に行われた蜂須賀家の日光参詣には、道中においてこれを降ろす旨、指示されている。藩主の駕籠は、註(15)「みとものつら絵巻」に描かれた藩主の駕籠と比較して、無勾配の屋根が異なる程度で、他はほとんど明瞭な差違を生じない。

駕籠廻りを警固する武士は、200～300余石の石高を有する中級士の平士で、絵巻に姓名が記された平士は、大日方左太之丞（小川茂作・勝実）・長江六之助（貞景）・樋口才左衛門（正吏）・前野延左衛門（信之）・浅田久米之丞（章胤）・岩田量助（長精）・森田勘兵衛（孝尚）・森宅兵衛（景敏）・皆月庄左衛門・萩野吉之進・武谷満介・渡辺久米蔵・若山正之助（八十郎・勝長）・稻田幾太郎・井上半助（高迢）の15名で、絵巻に描かれた人物より、1名の姓名記入の欠落がみられる。

うち若山正之助は、後年藩の命を受け、幕府砲術指南役高島秋帆の下で西洋砲術を研さんし、徳島藩に高島流オランダ西洋砲術を伝えた人物として著名である。また大日方・森田両名については、いずれも嘉永元年（1848）あてがい宛行・役儀召放の処分を受けたが、翌年の「分限帳」にはいずれもその名が見られ、しかもこの頃行われたと思われるこの日光参詣の供廻として派遣されている。註(16) 註(17)

平士に続く6名の供小性は、平常広間番を務める藩主親衛の大小性で、早川庸太（吉）郎（清魚）・小出一之助（直照）・村田愿三郎・渡辺勝之進・祖父江友次郎（宜伊）・和田泰之丞（安成）の姓

名が記され、うち1名は絵巻より消略されている。腰物筒に続く供目付は、供建の卒類監視を目的として派遣されるが、この役職は、徒士支配手許役と共に、徒士が務める最高の役職で、「成立書」から2名の供目付が確認される。

註(18)

これに続いて、絵巻は主として召具装束を着用した藩主供建の多数の仕丁が描かれている。一文字槍に続く長柄傘と草鞋取は、退紅を着した召具装束で、さらに3名の徒士に続いて、挟箱・茶弁当・召馬・召替馬が配されている。藩主供建の総数はおよそ35名で、その多くは白張の召具装束を着用する。藩主の召馬の馬副は11名で、馬丁6名の外、馬箤(鞭)・馬杓・挟箱・水田籠で組織される。「風蹄」と駒号が付された召馬は、鞍を置いた装備で、赤色の三繫と、鞍下には淡い緑の轡に虎皮の馬齧が装備されている。鞍は黒漆塗りの鞍に紺色の鞍襍を用いた大和鞍で、前輪・後輪・居木にはいずれも蒔絵は施されない。馬齧は供建の先頭に配された2頭の牽馬と同様、虎皮の馬齧が用いられ、鐙は黒漆塗りの木鐙で、その踏込は金泥で描かれている。これに対して、召替馬は「芙蓉」と駒号が付され、馬丁(2名)・挟箱・水田籠の4名で組織される。鞍・鐙は共に装備されるが、その全面は、虎皮の馬齧によってほとんど被覆されている。

以上の藩主供建に続いて、中列の後半には、3名の重臣による多数の供建が配されている。供建の総数は37名で、先頭を騎馬で進む佐野武兵衛(惟寛)と、これに続く騎馬の伴剛太郎(倫一)は、共に平士格の奥小姓で、両者はいずれも350石の石高を有する。これに対して、後方を騎馬で進む押の梯与一左衛門(克謙)は、560石を有する代々物頭席の上級士で、梯はこの日光参詣の総指揮を取る道中奉行の地位にあったと考えられる。うち先頭の佐野は、藩主の駕籠廻りを警固する平士の武谷満介と共に、文政12年に行われた蜂須賀家の日光参詣に続く再度の派遣である。3名の重臣は、いずれも御目得以上の武士が着する狩衣と、風折鳥帽子を冠した礼装で、多くの従者を従え藩主の供建に続く。

重臣の馬具は、ほぼ同一でそれぞれ明瞭な差違はみられないが、藩主召馬の馬具に比べて、いずれも虎皮の馬齧と厚総の尻繫が見られず、馬具の装備において、両者間に大きな差違を有している。

供建の構成は、馬丁・又供・一文字槍・挟箱・腰物筒・傘・草履取・水田籠で組織されるが、さらに奉行の供廻には、これに警固の武士6名が前後を固めている。重臣の供建に配される挟箱や長柄傘は、藩主供建に配される挟箱・長柄傘に比べて、前者は家紋がまったく付されず、後者は傘袋・紐の色が大きく異っている。しかも仲間の衣服も、藩主供建の仲間の衣服に比べて、帯・襟の色が明瞭に異っており、近世封建制における大名・家臣、直臣・陪臣間の著しい身分格差を示している。

3) 後列

後列の供建は、主として又供・重臣替馬・釣台で構成される。その総数は、絵巻に記された供数から計算すれば161名であるが、うち又供のおよそ90名の人物については、絵巻より消略されている。後列の供建に配される従者は、前・中列の従者と比べてその身分が低く、後列の供建では、前・中列の供建とは異なり、まったく従者の姓名が記されず、供数と駒号のみが記されている。

中列の最後部に配される奉行の供廻に続いて、まず後列の先頭には、陪臣の武士ならびに仲間の集

団が配され、この集団は絵巻上部に、「又供百三拾一人」と供数が記されている。彼らは藩主の供廻に配された徒士や仲間に比べて、陪臣は紺色の半上下の色が薄く、仲間は帯・襟の色が大きく相違する。仲間・小者が着用する衣類の質については、絵巻より確認できないが、徳島藩の藩法「元居書抜」に、「諸下代・弓鉄炮者、其外末々之扶持人共衣類木綿布可着之。帯・襟・袖継等之義、加賀絹以下可用之」とあり、仲間が着用する帯などは、主として裏地に用いられる加賀絹などの粗末な絹布であったことが知られる。^{註(22)}これに続く長柄傘と挾箱は、それぞれ7名の仲間で組織され、この集団の後に押として3名の武士が配されている。この武士は、姓名が記されずその役職は不明であるが、供建の構成から、多数の陪卒を監視する役職の武士と考えられる。

これに続く2頭の重臣の替馬は、馬丁（2名）・水田籠の3名でそれぞれ組織され、後半の釣台へと続く。重臣の替馬は、藩主召替馬の馬副と同様、いずれも白張の召具装束を着用する。2頭の替馬は、藩主召替馬の馬具に比べて、虎皮の馬齧が見られないのみで、他は藩主召替馬の馬具と同様、鞍・鐙・馬衣・尾韁（袋）^{うまぎぬ　おぶくろ}が装備されている。

重臣の替馬に続いて、絵巻は後列の最後部に釣台7荷と、供建最後の武士が描かれるが、蜂須賀家の長延な供建は、この最後の武士をもって終了する。7荷の釣台は、それぞれ2名の仲間が1組となって前後を担うが、絵巻上部に「釣台持式拾一人」と記されていることから、3荷7名が絵巻より消略されている。したがって本来、釣台は10荷で構成され、1名の小頭と20名の仲間によって組織されていたことが知られる。釣台は主として、道中の諸道具を運搬する道具で、文政12年に行われた蜂須賀家の日光参詣では20荷が用いられ、うち1荷には傘40本が常備されている。^{註(23)}これに続く供建最後の武士（3名）は、姓名が記されずその役職は不明であるが、供建の最後部に配されることから、主として仲間や小者を監視し、その列を整える役職の武士と考えられる。

以上のように、絵巻から蜂須賀家の日光参詣の供建をみてきたが、この供建は絵巻に消略された人物を加えると、317名にも及ぶ多数の直臣・陪臣団によって組織されている。江戸幕府は寛永12年（1635）の「武家諸法度」によって、諸大名に参勤交代制を義務づけ、その藩財政の弱体化を狙った。蜂須賀家の日光参詣は、「みとものつら絵巻」の「参勤図」に比べて、その供建には大差がみられないことから、この参詣に要した出費は多大であったと考えられる。

次に、この絵巻に描かれた蜂須賀家の日光参詣の年代について、簡単に触れてみたいと思う。蜂須賀家の日光参詣は、元和7年（1621）の2代藩主忠英の参詣以降、嘉永2年（1849）の13代藩主齊裕の参詣に至るまで、江戸時代を通じて15回の日光参詣が行われている。^{註(24)}うち初代・7代・9代・10代・14代の各藩主を除く大半の藩主は、それぞれの在任期に在府を機会として、春・夏期に日光参詣を行っている。家康を祭る日光東照宮の参詣は、蜂須賀家をはじめ幕藩体制下の大名にとって、対幕上極めて重要で不可避な参詣であったと考えられる。

絵巻に描かれた日光参詣の年代については、絵巻上部に記された徳島藩武士の藩勤仕時期から、その年代を促えることができる。絵巻に姓名が記された武士は96名で、うち各家の「成立書」からその約半数にあたる44名の武士について、その藩勤仕時期が知られる。その上限は、後列の先頭に配された佐野武兵衛の相続年度で、佐野は寛政9年（1797）義父量之助の跡目相続後、安政3年（1856）に没

するまで、59年間藩に勤仕している。下限は各家の「成立書」の記載が文久元年（1861）で終了するため、これ以降は不明であるが、うち明治2年（1869）の版籍奉還に至るまで藩に勤仕した武士も存在する。^{註(25)} したがって絵巻に姓名が記された武士は、江戸後期において徳島藩に勤仕した武士であることは疑いない。

そこで彼らの勤仕時期を詳細に比較してみると、1名を除く43名の武士は、相続以前、藩士格立身以前も含めて、すべて嘉永元年（1848）～3年にかけて藩に勤仕していることが明瞭に知られる。したがって絵巻に描かれた蜂須賀家の日光参詣は、幕末期の嘉永年間に行われたものと考えてよいであろう。その証左に、近年発見された徳島藩の藩撰史書「阿淡年表秘録・続篇」嘉永2年条に、「八月十三日公日光山御宮御靈屋御拝礼御願之通被蒙仰。廿二日江府出立、御宮江御太刀一腰、御馬一疋代黄金拾両、御靈屋江白銀拾枚御献上。九月三日御帰府」とあり、さらに「蜂須賀家記」嘉永2年条にも、「八月公詣日光山。拝東照・大猷二公廟。」とある。^{註(26)} すなわち本絵巻に描かれた蜂須賀家の日光参詣は、嘉永2年に行われた13代藩主齊裕による最後の日光参詣であったことが明瞭である。

最後に、以上促えられた諸点をもとに、絵巻に描かれた蜂須賀家の日光参詣の供建を図示してみよう。

先 払 馬丁	馬丁	挟 箱	撞木槍
ー 牽 馬 水田籠	ー 牽 馬 水田籠	ー 長柄傘	ー 徒 士
先 払 馬丁	馬丁	挟 箱	撞木槍
徒 士 同 同 同 (以下略)		平 士 同 同 同 同 同 (以下略)	
	ー 長 刀 ー 錫杖槍	ー 仲間	御 駕 仲間 同 ー
徒 士 同 同 同 (以下略)		平 士 同 同 同 同 同 (以下略)	
供小性 同 (以下略)	?	供目付	草履取 徒 士 挟 箱
ー	ー	ー 文字槍	ー 長柄傘 同 ー 徒 士 ー
供小性 同 (以下略)	腰物筒	供目付	長柄傘 徒 士 挟 箱
馬丁 同 同 馬籠	馬籠 挾 箱	馬丁 挾 箱 仲 間 又 供	
同 ー 茶弁当 ー 召 馬		ー 召替馬	ー 佐野武兵衛
馬丁 同 同 馬杓	水田籠	馬丁 水田籠 仲 間 又 供	
ー 文字槍 腰物筒・草履取	仲 間	又 供 ー 文字槍 腰物筒・草履取	
	水田籠 ー 伴	剛太郎	水田籠 ー
挟 箱 長柄傘	仲 間	又 供 挾 箱 長柄傘	
警固武士 仲 間	又 供	腰物筒・草履取 挾 箱	警固武士
警固武士 梯与一左衛門		ー 文字槍	水田籠 警固武士 ー
警固武士 仲 間	又 供	長柄傘 挾 箱	警固武士
供目付 ? 馬丁		馬丁	
又供131人 (略) ー	ー 重臣替馬 水田籠	ー 重臣替馬 水田籠 ー 釣 台 同 同	
供目付 ? 馬丁		馬丁	
供目付 ?			
同 (以下略) ー			
供目付 ?			

- 註(1) 太田孝太郎「南部藩參勤交代図巻」（奥羽史談会・昭和41年）。
- 註(2) 藩主・重臣の馬は、すべて三繫が赤であるが、牽馬は赤・紫・緑の三繫が用いられている。
- 註(3) 文政12年（1829）藩主斉昌は、日光東照宮へ参詣したが、宮へ御太刀2腰・御馬2疋代として、金10両外を寄進しており、現品の寄進がみられない（「阿淡年表秘録」文政12年条）。
- 註(4) 「村上延太成立書」徳島大学付属図書館蔵。
- 註(5) 「日光御宮御参詣一巻（文政12年）」（「阿波蜂須賀家文書」）国立史料館蔵。
- 註(6) 「阿波蜂須賀家文書」所収。
- 註(7) 前掲「日光御宮御参詣一巻（文化8年・文政12年）」。
- 註(8) 「嶋分イロハ付」（猪井達雄『稻田家中筋目録』3巻所収）。
- 註(9) 徳島大学付属図書館蔵。
- 註(10) 20名の徒士のうち、経歴の判明する16名については、嘉永年間藩に勤仕している。
- 註(11) 「小出直左衛門成立書」、「加田仁右衛門成立書」。
- 註(12) 「矢嶋権郎成立書」。
- 註(13) 前掲「日光御宮御参詣一巻」。
- 註(14) 三谷貴啓氏ご教示。
- 註(15) 前掲「日光御宮御参詣一巻」。
- 註(16) 「大日方権右衛門成立書」、「森田忠太成立書」。
- 註(17) 「嘉永二年分限帳」（徳島県博物館筆写本）。
- 註(18) 村田和太助（貞久）・服部権助（有恒）。
- 註(19) 「佐野武兵衛成立書」、宮本武史『徳島藩士譜』下巻（徳島藩士譜刊行会・昭和47年）。
- 註(20) 「梯英太郎成立書」。
- 註(21) 前掲「日光御宮御参詣一巻」。
- 註(22) 石井良助『藩法集・徳島藩』元禄9年（1696）条、（創文社・昭和37年）。
- 註(23) 前掲「日光御宮御参詣一巻」。
- 註(24) 元和7年（1621）・寛永13年（1636）・同17年・正保3年（1646）・慶安2年（1649）・承応2年（1653）・寛文9年（1669）・同11年・宝永3年（1706）・享保14年（1729）・宝暦元年（1751）・同3年・文化8年（1811）・文政12年（1829）・嘉永2年（1849）。〔『阿淡年表秘録』〕。
- 註(25) 「佐野武兵衛成立書」。
- 註(26) 供目付、村田和太助（「村田庸安成立書」）。
- 註(27) 徳島市史編さん室蔵。
- 註(28) 岡田鴨里編『蜂須賀家記』（明治9年・東洋社）。

おわりに

以上のように、蜂須賀家旧蔵の絵巻から、嘉永2年13代藩主斉裕によって行われた蜂須賀家の日光参詣の供建をみてきたが、この供建は、藩主の駕籠を核とし、317名にものぼる多数の直臣・陪臣団によって組織された極めて多大な供建であった。この頃、徳島藩の藩経済は破たんの一途をたどり、この日光参詣が行われた同年には、藩士の禄10分の3を削減しなければならない状態であった。こうした状況において、江戸期最後の日光参詣を行った藩主斉裕は、元来11代将軍家斉の22子として、衰退する幕府権力の中で、家康を祭る日光社の最後の参詣を強行したのであった。

幸いこの供建については、絵巻上部に徳島藩武士の姓名が記されていたため、この経歴からその構成が伝えられ、蜂須賀家の基本的な供建の構成を知ることができた。

最後にこの絵巻の筆者については、残念ながら、徳島藩御用絵師の中で、比定すべき人物が見当たらず、現在不明と言わざるを得ない。ただ、本絵巻には、藩主の跡供に中小性格茶道役の茶弁当掛梶真悦（旗山）が描かれていることが注目される。彼は同家の「成立書」によれば、日光参詣に派遣される直前、奥坊主から中小性格の茶道役に立身し、のち藩御用絵師の重鎮守住貫魚と共に、藩主に随行して淡州・摂州などに赴いている。元来、彼は画業を本職とはしていないが、わずかに伝世する作品によって絵画を製作したことが知られる。中でも藩命による「阿波淡路両国産物誌」136巻の彩色図譜は、彼とその子英朴の2代にわたる苦心の作品で、その力量は高く評価されている。絵巻に描かれた人物の表現と、彼の作品との間には、比較的相似点も見出せるが、現段階では比定は困難である。しかし絵巻に描かれた茶弁当掛梶真悦の表情は、描かれる214名の多数の人物の中で、ただ一人眉毛を上げた異例の姿態で表現されている。（図6）今後の比較資料の発見を待ちたい。

終わりにあたり、先学諸氏の忌憚ないご叱正を受けたいと思う。

註(1) 前掲『蜂須賀家記』。

註(2) 「梶真悦成立書」。

註(3) 東京国立博物館蔵。



図6 梶 真 悅